

〔別紙1〕

論文内容の要旨及びその審査結果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 英語学・英語教育学分野	氏 名	ジョセフ チャルス ウッド
学位審査委員	主 査 佐 藤 一 嘉 (教 授) 副 査 大 岩 昌 子 (教 授) 副 査 ドウエイン キント (准教授) 副 査 ティム マーフィー (神田外語大学 外国語学部 教 授)		

1. 論文の目的

コミュニケーション・ストラテジーとは、言語話者が会話につまずいたり、ある言葉が思い出せなかったり、相手の言葉が理解できなかった際に使用するストラテジーである。コミュニケーション・ストラテジーを外国語の授業で導入する効果について、1980年代から様々な研究がされてきた。しかしながら、Ellis (2008)が指摘するように、ほとんどの研究は短期的なものであり、コミュニケーション・ストラテジーの使用と言語習得の関係については、明らかになっていない。

この研究課題を追求するため、本研究は、今日注目されている新しい言語運用能力—インタラクション能力(話し手とのインタラクションを通して身につける言語運用能力であり、具体的には発話交代: turn taking、つまずきの修正: repair、発話行為のマネージメント: managing speech acts)—を研究テーマとし、混合的研究法(量的データと質的データ)を用いて、データ収集および分析を行った。具体的には、大学生(本学フランス語学科1年生)が1年間に渡り、様々なコミュニケーション・ストラテジーを英語の授業で学習して、クラスメートと会話を繰り返す中で、どのようにインタラクション能力を向上させることができたのかを探究した。以下の4つを研究質問に掲げた。

- (1) 学習者はどのようにコミュニケーション・ストラテジーを使用して、スピーキング力を向上させるのか？
- (2) 学習者はクラスメートと会話(インタラクション)を繰り返す中で、どのように学び合うのか？
- (3) 学習者はどのような発達段階を経て、コミュニケーション・ストラテジーを習得するのか？
- (4) 学習者はクラスメートとのインタラクションを繰り返して、どのようにインタラクション能力を向上させるのか？

2. 論文の構成と内容

本論文は6章から構成されている。

第1章では、初めに研究目的が明示され、その後、この研究の理論的背景が述べられている。理論的背景は、次の7つである。

- (1) コミュニケーション能力、(2) 学習ストラテジー、(3) コミュニケーション・ストラテジー、(4) 認知心理学に基づくストラテジー学習、(5) 社会文化理論(sociocultural theory)、(6) インタラクション能力、(7) 認知心

論文内容の要旨及びその審査結果

理学と社会文化理論の融合

第2章では、コミュニケーション・ストラテジー、インタラクション能力に関する文献研究がまとめられ、その後、これまでの研究課題が明らかにされている。コミュニケーション・ストラテジーの研究に関しては、(1) コミュニケーション・ストラテジーの使用と言語習得との関係、(2) コミュニケーション・ストラテジーの習得段階、また、インタラクション能力の研究に関しては、(3) インタラクション能力の発達段階について、ほとんど解明されていない。さらに、研究方法については、(4) 多くが短期的で、実際の教育現場における研究が少ない、(5) 質問調査などの量的データを用いた研究がほとんどであり、インタビューなどの質的データを用いた研究が少ない、などの課題が明らかになった。これを踏まえて、上記の4つの研究質問が導かれた。

第3章では、研究方法について詳しく述べられている。初めに対象者として、本学(名前の掲載はなし)のフランス語学科1年生18名(男子3名、女子15名)の英語の授業(週1回、90分、授業者—研究者)の中身についての説明があり、使用教科書、授業計画(様々なコミュニケーション・ストラテジーの導入)の詳細が述べられている。その後、それぞれのデータ収集についての説明があり(質問調査、ログブック:ストラテジー学習の振り返り、ペアでの会話のビデオ撮影、スピーキングテスト、インタビュー:男子3名、女子3名)、最後に、それぞれのデータの分析方法と混合的研究法に基づく量的データと質的データの融合について述べられている。

第4章は、大きく3つに区分され、研究結果がまとめられている。初めに、コミュニケーション・ストラテジー使用の質問調査の結果が報告されている。学習者は、会話を始めたり(How are you doing?)、終えたりするストラテジー(Nice talking with you. You, too.)をすぐに習得し、ペアで3分の会話を始めた。その後、リアクション(Oh, really? Sounds nice.)やシャドーイング(相手が使用したキーワードの繰り返し)が使えるようになった。そして、前期の後半には、関連質問(follow-up questions)ができるようになり、会話も5分続くようになった。後期の初めは、前期のコミュニケーション・ストラテジーの復習をして、ペアで5分の会話から始めた。賛成、反対(agree, disagree)のストラテジーが使えるようになり、一部の学生は、不明な点についての質問・説明(clarification)ができるようになった。また、後半には、相手の説明の要約(summarizing)ができる学生も現れ、ペアでの会話は6分続いた。次に6名の抽出学生の会話のビデオ分析の結果(4月、7月、12月の発話交代の回数:turns per minute)が報告されている。全員が4月に比べ7月のペアの会話では、発話交代の回数を増やしている。また、後期は、トピックが難しくなったにもかかわらず、12月には、3名の学生がさらに回数を増やしている。発話交代の回数の増加は、インタラクションの回数が増えたことを意味し、インタラクション能力の伸長を示唆している。

2つ目は、質的データ(ログブック:学生のコメント、6名のインタビュー、6名の会話のビデオ分析)の分析

論文内容の要旨及びその審査結果

結果である。その結果、4つの発達段階が明らかになった。第1段階は、4月から5月にかけてである。学生は、基本的なコミュニケーション・ストラテジーを習得し、ペアでの会話にも慣れてきたが、沈黙の回数も多く、まだ意味のやりとり(negotiation of meaning)はできていない。第2段階は、6月から7月にかけてである。学生は、基本的なコミュニケーション・ストラテジーを使うことに自信を持ち始め、関連質問ができる学生が増えてきた。学生のコメントから明らかになったのは、学生同士のインタラクションを繰り返す中で、コミュニケーション・ストラテジーの使用が上手な学生から影響を受け、学んでいることである。また一部の学生だが、意味のやりとりができるようになってきた。その結果、発話回数が増え、全員ペアで5分の会話が続くようになった。第3段階は、9月から10月にかけてである。学生は夏休みの後、基本的なコミュニケーション・ストラテジーを忘れていたが、復習をするとすぐに思い出して使えるようになった。しかしながら、まだ、賛成、反対のストラテジー(agree, disagree)、不明な点についての質問・説明(clarification)ができる学生は一部であった。第3段階は、11月から1月にかけてである。前期に学んだ基本的なコミュニケーション・ストラテジーを自由に使えるようになり、後期に学んだ賛成、反対のストラテジーを使ったり、不明な点についての質問・説明ができるようになってきた。全員が6分の会話ができるようになった。以上、質的データの分析結果は、量的データ(質問調査)の結果を裏付けるものであり、さらに詳細なデータによって、4つの発達段階が明らかになった。

3つ目は、スピーキングテストの分析結果である。18名の学生は、前期末(7月)と後期末(1月)にそれぞれペアでスピーキングテストを受けた。テストは、本学のスピーキング・ラボで実施され、録画された。評価基準に基づき、2名の英語母語話者である教員が評価した。その結果、18名中12名のスコアが伸びたことが(2名が変化なし、4名が少し減少)わかった。さらに、統計分析で使用するSPSSでt-testを実施した結果、平均点の伸びが有意であることが証明された。以上、混合的研究法に基づく量的データと質的データの融合分析の結果、コミュニケーション・ストラテジーの使用とスピーキング力の向上に関係性があることが明らかになった。

第5章は、考察であり、4つの研究質問に答えている。初めに研究結果がまとめられ、それぞれの質問について、以下のように論じられている。

(1) 学生は、授業で学んだコミュニケーション・ストラテジーを実際にクラスメートと会話(インタラクション)を繰り返す中で、習得していった。特に、ビデオ撮影のあと、自分で会話を書き起こし、コミュニケーション・ストラテジーが実際に使えたのか自己評価することによって、様々なコミュニケーション・ストラテジーの使用(不使用)を認識した。その結果、学生はスピーキング力を向上することができた。

(2) 学生達はインタラクションを繰り返す中で、お互いに協力し合い学びあった。様々なコミュニケーション・ストラテジーの使用には個人差があったが、早く使えるようになった学生の影響を受け、次第に多くの学生が様々なストラテジーを使用し、発話交代の回数を増やして6分間の会話が続くようになった。

論文内容の要旨及びその審査結果

(3) 学生は、基本的なコミュニケーション・ストラテジーをすぐに習得し、その後、シャドーイングや関連質問をしてインタラクションの回数を増やしていった。そして、後期には賛成、反対のストラテジーや不明な点についての質問・説明ができる学生が増え、インタラクション能力を高めていった。

(4) 学生は、以下の発達段階を経て、インタラクション能力を高めた。初めに、基本的なコミュニケーション・ストラテジーを使用して、クラスメートと協力しながら3分の会話ができるようになった。そして、発話交代の回数を増やして、4分から5分の会話がつづくようになった。さらに、学生は、賛成、反対のストラテジーの使用、不明な点についての質問・説明ができるようになり、つまずきの修正や、発話行為のマネージメントをして 6 分の会話ができるようになった。

第 6 章では、結論及び今後の研究課題が述べられている。結論として、学生がコミュニケーション・ストラテジーをクラスメートとのインタラクションを繰り返す中で習得し、インタラクション能力(発話交代、つまずきの修正、発話行為のマネージメント等)を高めていった。その結果、スピーキング力を伸ばすことができた。特に、混合的研究法に基づく量的データと質的データの融合によって、発達段階が明らかにされた。最後に、この研究の限界として、(1)対象者が 18 名に限られていること、(2) 他の教員による英語の影響が不明であること、(3)授業外で、ネイティブの英語話者との接触が不明であること、を挙げ、今後の研究課題として、混合的研究法に基づく同様の研究が継続されることを提起している。

3. 論文審査の結果

本論文の研究テーマと研究課題の設定について、綿密な文献研究に基づいた価値のあるものであり、特に、Ellis (2008)が指摘した研究課題—コミュニケーション・ストラテジーに関するこれまでのほとんどの研究は短期的なものであり、コミュニケーション・ストラテジーの使用と言語習得の関係については、明らかになっていない—を混合的研究法に基づいてデータ収集および分析をして、コミュニケーション・ストラテジーの発達段階を明示したことには意義がある。さらに、昨今注目されている新しい言語運用能力—インタラクション能力—の発達段階にも示唆していることは、言語習得研究の分野に貢献することができる研究であると評価される。

しかしながら、2、3 の問題点も指摘された。初めに、スピーキング・ラボで撮影されたビデオ会話の書き起こしと自己評価は、学生個人でやったのか、それともペアで協力してやったのかが、明らかになっていない。また、考察の中で、研究質問の 4 について、インタラクション能力の発達段階についても質問があり、申請者からの説明があった。こうした点が指摘されたが、論旨については問題がないことが確認された。

以上を総合的に判断し、本審査委員会は本申請論文が課程博士学位論文としての水準に達していると認め、委員全員が一致して合格と判定した。